■コメント

歴史地理学　58－1（278）39-40　2016. 1

原田洋一郎報告と米家泰作報告によせて

平　岡　昭　利

地域資源をめぐり「権力と所有」という視点から，２つの報告についてコメントを行う。報告は (1) 原田洋一郎「地域と鉱物資源」と (2) 米家泰作「草原の「資源化」政策と地域－近代林学と原野の火入れ」である。

原田報告は，鉱物資源の特徴，その領有と開発主体，近世から近代への鉱業の展開と地域資源としての鉱物，それに関わる地域社会の多様性を浮き彫りにしようとした報告であった。この報告をふまえて，鉱物資源と地域やその特殊性，課題などについてコメントした。

鉱物資源は，シンポジウムのテーマの「地域資源」として地域社会との関わりを持つが，その一方で，資源を所有する権力（管理，経営）にとっては，地域を限定しない「略奪的な性格」をもち，その販売は国や世界を指向する。このような性格から鉱山（都市，集落）空間は，地域的性格を持つと同時に「異質」な世界的な特徴も備えている。この鉱業の持つ「異質性」について，もっと言及されても良かったように思われる。

鉱業，鉱山を整理すると，報告にもあったように，開発主体の性格が空間にも大きく影響する。幕府直轄領と藩領，民営鉱山などの開発主体の違いは，地域空間にどのような影響を与えたのであろうか。また，鉱業空間を，前述したようにミクロとマクロの「交差する空間」として捉えることによって，地域社会や地域資源に新たな意味を付与することができるのではないだろうか，とも思う。この課題については，さらなる研究の展開を期待したい。

また，鉱物資源には「持続性」と「優位性」という問題がある。地域にとって鉱物資源は永遠に存在するものではなく，むしろ持続不可能なものであり，わずか数年で閉山し，長期でも半世紀を越えて維持される鉱山は少ない。また「優位性」については，より優良な品質の鉱山が発見されれば，劣質な鉱山は放棄され，さらに従来の鉱物資源に代わる「優位な資源」が見いだされれば，日本の炭鉱のように閉山し崩壊する。

以上のような，いわゆる鉱山に特有の負の側面である「持続性」（鉱物資源の枯渇）や「優位性」（価値変動）などによって，地域は翻弄される。鉱物資源の発見を契機に形成された都市や町は，その資源の放棄によって真逆の現象，スクラップ化やゴーストタウン化へと進むのである。

たとえば，世界文化遺産に登録された長崎県の端島は，その典型的なモデルとも言えるが，現在，日本の炭鉱はスクラップ化し，炭鉱都市は人口激減に喘いでいる。多くの中小鉱山は，すでに過疎という人口減少以前からゴーストタウン化している。

この「持続性」「優位性」という鉱山地域に強く現れる性格が，地域にどのような影響を与えたのか，なども興味深いテーマである。

次の米家報告は，近代における林野資源をめぐる国や県などの林野行政，林学などのナショナルスケールの立場と，町や村というローカルスケールの立場から，「原野の火入れ」の是非について，そのせめぎ合いをテー

マとした報告であった。

まず，気になったのは，タイトルの「草原」の定義である。副題には「原野」とあるが，一般には林地，草地，荒地などは，地目としては「原野」が使用されている。草原とすると，よりミクロな限定した範囲になるように思われる。この2つの言葉が同時に使用されており，わかりにくいように感じられた。この点については，小椋純一『森と草原の歴史－ 日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか』（古今書院，2012年）が詳しい。

さて，報告の主題である「原野の火入れ」であるが，国や県，さらに林学関係者が，森林の回復を提唱し，火入れを不要，禁止したことに対して，馬の飼育が盛んな長野県木曽郡の町村は，火入れは有効として再開運動を展開した。この件に関して，報告者は一律的な国家主導の林業行政を覆す試みであったと評価した。

確かにナショナルとローカルという対立軸では，馬の飼育が盛んで牧草の生産を重視している地域では，火入れは重要であると認識したと思うが，馬の飼育だけではなく，原野（草地）の畑作化が進んでいた地域などでは，どのように「火入れ」を捉えていたのであろうか。火入れ自体も毎年行った地域もあれば，数年に1回しか行わない地域もある。このように火入れ問題に関しては，「地域的条件」とそれに関わる「地域の主体」を十分に検討する必要がある。

以上のコメントは，大会発表資料の米家レジメ（p77）の最後に書かれてある「資源利用に内在する地域性を見落としがちであったことは，改めて再認識されなければならない。」という指摘の通りである。ただ，それはマクロスケールとミクロスケールという対立的な問題だけではなく，ミクロスケール間においても検討されるべき課題である。

一見，単なる草原が広がっている牧場のように感じられる場合でも，地域ごとに利用形態は大きく異なっているケースも多く，利用について地域間の対立を含む場合も多い。さらにミクロに見れば，草地は，干草場，飼育場，肥草場，カヤ場など利用主体によって様々に区分して利用が図られており，その利用も年々変化していることなどにも留意することが必要である。

報告者の今後の研究の進展に期待したい。

（下関市立大学名誉教授）